

はしがき

平和学あるいは平和研究という学問分野が生まれてほぼ半世紀が経つ。日本平和学会は1973年に設立されて、今年で45年目になる。1976年に日本の大学で初めて「平和学」という科目が開講されて以来、まだ平和学部こそないが、いま日本の大学・大学院で平和学、平和研究関連の授業科目は広汎に開講されている。しかし、平和学、平和研究の普及にもかかわらず、いま平和研究は危機にあるのではないだろうか。

冷戦終結後、大国間の核戦争の危機はたしかに低下したかもしれないが、冷戦が「凍結」していた諸問題——植民地主義の克服、国連安保理の活性化、専守防衛を超える自衛隊の活用等——が前景化し、新たに「対テロ戦争」、新自由主義的グローバル化の暴力の問題が生まれ、さらには多国間主義から自国中心主義への変化、差別と排除の「逆襲」等々、平和研究の課題は複雑化している。また同時に、日本政府の「積極的平和主義」「平和安全法制」という表現が示すように、平和の概念、平和主義の概念をめぐる闘争が起きているというべきであろう。いま平和研究自身の再構築が必要とされている。

本書は、いま日本の平和研究が取り組むべき14の論点を選び出し、それらの論点について、命題を示し論証しながら、研究課題・論点に関して、考え方の道筋を示すものである。14の論点は、平和研究の独自の課題、平和研究が必要とされる理由について論じる「第Ⅰ部 なぜ平和研究か——その原動力」、誰がどのように平和をつくるのかについて説明する「第Ⅱ部 平和創造の主体と手法」、そして日本においてとりわけ重要となる平和課題についてどう考えるかを述べる「第Ⅲ部 平和研究の日本的文脈——その視座と方法」に大きく整理できる。それぞれの論点について、重要な課題と参考文献がカバーされている。

本書は、大学・大学院の授業で教科書ないし参考書として使っていただくことを想定しているが、平和問題に関心をお持ちの市民のみなさん、意欲的な高

はしがき

校生のみなさんにも手に取っていただけるとうれしく思う。本書の執筆陣は、それぞれの論点、それぞれの専門分野に関する気鋭の研究者であり、すべて日本平和学会の会員である。本書の刊行は日本平和学会のプロジェクトである。執筆者としては、本書が、平和研究の再構築、そして平和創造・平和構築にとって、意味のある触媒として活用されることを切望している。

本書の企画から刊行にいたるプロセスにおいて、法律文化社の小西英央氏にたいへんお世話になった。心から御礼を申し上げたい。

執筆者を代表して

遠藤 誠 治

石田 淳

君島 東 彦

黒田 俊 郎